

# 「いま」の自己の素朴理論<sup>1</sup>

—自己生成項目の評定値からの検討—

白川 雅之・金敷 大之

The Naive Theory of Present Self : The Investigation of  
Rating Values of the Self-generated Item

Masayuki Shirakawa and Hiroyuki Kanashiki

The purpose of this study was to clarify what the naive theory of present self is and how it has been constructed. The naive theory of present self was investigated by analyzing rating values of the self-generated item. Three hundred and twenty subjects described the desirable and undesirable characteristics of present self respectively, and generated past events attributed to them and future events predicted by them. Then the subjects rated on five pointing scale four dimensions about the generated events ; the degree of attribution of luck, attribution of self, possibility of reappearance, and benefits to self. The results revealed that (1) the events generated from the desirable characteristics were attributed to luck and the events generated from the undesirable ones were attributed to self, (2) the future events generated from the desirable characteristics will be repeated, (3) the events generated from the undesirable characteristics will cause disadvantages to self. Finally the effectiveness of this approach was discussed in terms of being able to understand objectively subjective aspect of individuals.

Key words : naive theory, present self, desirable and undesirable characteristics of self, self-generated item

われわれはいま・この自己の特性を、完璧ではないにしても説明することができる。なぜなら、われわれはそれを説明するのに必要な自己についての知識あるいは理論を持っているからである。このような知識や理論は自らの体験を因果連関的に捉える中で構築されたものであり、さらには経験を繰り返す中で必要に応じて修正され、体系化されたものである。その際の

因果連関的把握あるいは体系化は、厳密な手続きを経て構築された科学理論ほど普遍性を持たないという点で、科学理論とは異なるものである。しかし、われわれはそれを日常的に用いて生活していることから、ある程度の法則性や普遍性を兼ね備えていると考えられる。昨今の認知心理学や社会心理学の領域では、それは科学理論と区別して、素朴理論(naive theory)もしく

---

<sup>1</sup> 本研究は野村幸正(関西大学文学部教授)に対して与えられた平成7年度文部省科学研究費(総合研究(A),児童期以降の心の理論(素朴心理学)の発達に関する総合的研究(代表:波多野誼余夫),課題番号06301015)に基づくものである。また本研究の一部は、関西心理学会第107回大会において発表された。

は素人理論(lay theory)と呼ばれている(Furnham, 1988; 丸野, 1994)。

現在, このような自己の素朴理論のみならず, 素朴理論に対する関心は高く, その領域は多岐に渡っている(丸野, 1994)。その理由の一つは, 素朴理論が日常的な行動を研究対象とし, たとえ不十分であるとしても, それを説明するからである。また, もう一つの理由は, 行為を説明する素朴理論とわれわれが行為を生成する際に依拠する理論との間には深い関係があり, 前者から後者を推測できるからである。

従来, 素朴理論に関する研究は, 分析対象となる素朴理論を科学理論と対比させるなかで行われ, 素朴理論から科学理論への移行過程を説明することに主眼が置かれてきた。というのは, 科学理論を精緻化された絶対的なものとみなし, 素朴理論を稚拙なものとする考えがあったからである。例えば, 高橋・波多野(1993)は, 銀行の機構について人びとが持っている素朴理論を研究している。この場合, それを合理的に説明する理論が存在することから, 銀行についての素朴理論から科学的な理論への移行過程を取り上げることは可能である。ところが, 自己についての理論(自己理論)は銀行の機構に関する研究とは異なり, 素朴理論と科学理論とを厳密に区別することは難しいと思われる。

心理学史上, これまで数多くの自己理論が存在するが, そのほとんどが科学的な手法を用いて構築されたものである(中村, 1990)。しかし, これらの自己理論は規範理論的な性格を帯びており, 人びとが関心を抱く日常的なレベルの自己理論ではない。そのため, われわれがその理論を実際の生活の中で使用することはまれである(遠藤, 1995)。また, 帰属判断に関する実験的研究が進むにつれて, 実際に行われる帰属判断と帰属理論に基づいて立てられた予測との間にはずれが生じることが明らかになってきた。これが帰属錯誤あるいは帰属における自己バイ

アスに関する一連の研究である(e.g., Fiske & Taylor, 1984; Ross, 1977)。これらの研究もまた, 従来の自己理論の妥当性に疑義を呈するものであると思われる。

したがって最近では, 上記のような帰属錯誤の事実を錯誤とは捉えず, むしろ人びとが現実に行っている帰属という意味で, 認知過程の基本的な特徴を示す研究として位置づけることが多い(蘭・外山, 1991)。そのため, 錯誤とは捉えない新しい見方からすれば, 素朴理論を科学理論への移行段階として捉えるよりも, 各人が構築している素朴理論そのものを直接検討する必要があると考えられる。これが科学理論に対比させない新しい自己理論についての研究であり, 自己の素朴理論の研究である。

このような自己の素朴理論は, いま・この自己に基づいて因果連関的に構築されると考えられる。したがって素朴理論の構築あるいは運用の際の基準は, 主観的かつ相対的なものである。主観的かつ相対的なものである以上, 自己の素朴理論は不変的なものではなく, 流動的な側面を持つと考えられる。科学理論と違って素朴理論の構築と運用過程を客観的に研究するのが困難なのは, このような理由が考えられる。またこのことが自己理論が素朴理論に終始する理由でもある(野村, 1995)。

そこで本研究は, 普遍的な自己理論を想定するのではなく, あくまでも個々人が「いま」抱いている自己の素朴理論がどのようなものか, またそれがどのように構築されていくのかを明らかにしていく。その方法として, 自己生成項目に基づく評定値の分析を行う。

具体的には, まず個々の被調査者に「いま」の段階で, 望ましい及び望ましくない自己の特性を一つずつ自由に記述させる。それは, 望ましさの程度によって, 下記で述べる過去と未来の事象に対する帰属の仕方が異なることが予想されるからである。これは, 成功の原因を努力

や能力といった自己の内的要因に帰属し、失敗の原因を運などの外的要因に帰属する自己バイアスの研究(e.g., Fiske & Taylor, 1984; Ross, 1977)からも明らかである。続いて、「いま」の段階でその特性の原因となっている過去の事象及びその特性ゆえに未来で生じると思われる事象を生成させる。過去の事象は「いま」の自己の特性が結果としてもたらされたことに対する原因であり、未来の事象は自己の特性を原因としたその結果である。これら自己の特性あるいは過去、未来の事象は自らの経験を因果連関的に把握してきた「いま」の自己の特性の反映である。この把握は極めて主観的なものであり、比較すべき明確な基準をもたないが、それらはいま・ここの拡がり(野村・西田, 1992)のなかで析出された因果関係という意味で、被調査者間では共通している。

次に、本研究では、自己の特性と過去あるいは未来の事象との因果連関の成立に及ぼす効果を検討するために、被調査者に過去及び未来の事象をどのように評価しているか、具体的には自己の関与の及ぶ範囲か(自己への帰属度)、それとも運命的なものか(運命への帰属度)、あるいは自己にとって利益のあることか(自己利益度)、さらにはそれが再び起こるか(再現可能性度)を評定させる。これらの次元は、自己の特性と生成された事象との間に因果連関が成立する上で、個々人の主観的な判断基準として重要な位置を占めている。また生成された事象と同じように、この評定にも、「いま」の自己が因果連関的な把握に及ぼす諸要因の影響をどのように捉えているかが反映されていると考えられる。

この方法によって明らかにされる自己についての諸特性は、個々人が捉えた自己の因果連関的な事実を反映したものである。また因果連関が成立の際には種々の要因が関与することから、それらの要因の効果を反映したものである。し

かも、それらの諸特性が個々人の「いま」において体系化されている以上、因果連関が成立する要因を自己の素朴理論として捉えることができる。したがって明示化された自己の素朴理論がそのまま自己の行為を生成する理論として機能し、あるいは自己の内面に関する知識として存在すると考えられる。本研究は、このような前提の上に、自己生成項目の評定値の分析を通じて、個々人が抱く素朴理論の構築及び運用過程を明らかにする。具体的には、上述の次元の中で、自己への帰属度及び運命への帰属度を分析することによって、自己の素朴理論の構築過程を検討し、自己利益度及び再現可能性度を分析することによって、自己の素朴理論の運用過程を検討する。

## 方法

**被調査者** 被調査者は一般教養の心理学を受講している大学生であり、大半が一回生である。そのうち記入もれ及び意味不明の回答を除いて(34名)、最終的に残った320名(男性189名・女性131名)を分析の対象とした。

**手続** 調査は授業担当者によって実施された。James(1890)の自己理論を概説することによって、自己を広範に捉えるように教示した後、調査用紙が配布され、本調査の回答方法が説明された。

望ましい自己の条件では、被調査者に「いま」の自己にとって望ましいと思われる自己の特性を一つ自由に短文の形で記述させ、さらにその原因となっている過去の事象とそれから予測される未来の事象を同じく短文で一つずつ自由記述させた。この自己生成に続いて、被調査者が記述した過去と未来の事象それぞれを、運命への帰属度、自己への帰属度、再現可能性度、自己利益度の4つの評定次元について、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの5

件法で評定させた。運命への帰属度とは「その出来事・事態は起こるべくして起こった(未来の場合: その出来事・事態は起こるべくして起こる)」程度であり、自己への帰属度とは「その出来事・事態の原因は自分にある」程度である。また再現可能性度とは「その出来事・事態は繰り返される」程度であり、自己利益度とは「その出来事・事態が起きた時点では、それは私にとって都合のよいことだった(未来の場合: その出来事・事態が起きると、私にとってはよいことになる)」程度である。

望ましくない自己の条件では、被調査者に「いま」の自己にとって望ましくないとされる自己の特性を望ましい自己の条件と同様に一つ自由に記述させ、さらにその原因となった過去の事象とそれから予測される未来の事象を一つずつ自由記述させた。続いて、被調査者が記述した過去と未来の事象それぞれを、上記の4つの評定次元について5件法で評定させた。

なお、望ましい特性条件と望ましくない特性条件は被調査者内変数であり、同じ人が記述したことによる順序効果を避けるため、半数は望ましい「いま」の自己の特性を先に回答し、半数は望ましくない「いま」の自己の特性を先に回答した。なお、本調査を遂行するのに必要な所要時間は平均して約30分程度であった。

## 結果と考察

### 1. 自由記述の分析

まず、被調査者が自由に記述した「いま」の自己の望ましい特性と望ましくない特性を山本ら(1982)および遠藤(1992)を参考にして、学業・仕事、人間関係、パーソナリティ、ライフスタイル、資産・物質、身体の6つのカテゴリーに分類した。続いて、被調査者が「いま」の自己の特性から生成した過去と未来の事象についても、上記と同様に、6つのカテゴリーに分

類した(Table 1)。これらの分類は、いずれも著者3名の合意に基づいて行われた。学業・仕事に関する代表的な記述は「大学に入学したこと」であり、人間関係に関する代表的な記述は「友達に裏切られたこと」である。パーソナリティに関する代表的な記述は「冷静であること」であり、ライフスタイルに関する代表的な記述は「時間を無駄にしないこと」である。資産・物質に関する代表的な記述は「お金がないこと」であり、身体に関する代表的な記述は「健康であること」である。

「いま」の自己の望ましい特性に関しては、パーソナリティに関する記述は119人と最も多く、人間関係の記述は105人、学業・仕事の記述は44人、ライフスタイルの記述は35人であった。「いま」の自己の望ましくない特性に関しては、パーソナリティに関する記述は140人、人間関係の記述は125人であった。

Table 1: 「いま」の自己の特性及び生成された事象に対する内容の分類(人数)

	望ましい特性			望ましくない特性		
	過去	いま	未来	過去	いま	未来
学業・仕事	106	44	92	65	19	69
人間関係	169	105	150	201	125	181
パーソナリティ	11	119	15	12	140	19
ライフスタイル	11	35	53	16	22	35
資産・物質	16	13	8	12	7	11
身体	7	4	2	14	7	5

「いま」の自己の望ましい特性の原因となった過去の事象については、人間関係に関する記述は169人と半数を占め、学業・仕事の記述は106人であった。また、その特性から予測される未来の事象については、人間関係に関する記述は150人と最も多く、学業・仕事の記述は92人、ライフスタイルの記述は53人であった。「いま」の自己の望ましくない特性の原因となった過去の事象については、人間関係に関する記述は201人と半数を超え、学業・仕事に関する記

述は65人であった。また、その特性から予測される未来の事象については、過去の事象と同じように、人間関係に関する記述は181人と最も多く、学業あるいは仕事に関する記述は69人、ライフスタイルに関する記述は35人であった。

これら一連の結果は、「いま」の自己の望ましいあるいは望ましくない特性いずれの場合にも、人びとは自らを人間関係やパーソナリティといった側面から捉えていることを、また「いま」の自己が析出した過去と未来の事象については、人間関係や学業あるいは仕事といった側面が重視されていることを示唆している。中でも、過去の事象において学業・仕事の割合が人間関係に次いで多かったのは、対象となる被調査者の大半が一回生であり、大学受験の成功や失敗が特に影響を及ぼしたのではないかということが予想される。

## 2. Weiner(1985)の3次元分類に基づいた分析

このように、自己の素朴理論はある時点の出来事あるいは体験に影響を受けている。そこで問題となるのは、個々人がそれらをどのように受入れ、また自己の理論を構築してゆくかである。この点を明らかにするために、「いま」の自己の望ましい特性と望ましくない特性から生成された過去と未来の事象を、Weiner(1985)に基づいて、①原因の所在(内的か外的か)、②安定性(安定的か不安定か)、③統制可能性(統制可能か統制不可能か)の3次元に分類した。本研究において、Weiner(1985)の分類を用いたのは、Table 2に示すように、帰属次元と帰属タイプの関係が比較的明確であり、本研究の目的に合致するからである。Table 3, Table 4, Table 5, Table 6は分類結果であり、いずれも著者3名の合議を基づいて行われた。

Table 2: 原因帰属の次元的特徴(Weiner, 1985)

	統制可能		統制不可能	
	安定	不安定	安定	不安定
内的	安定的な 自己の努力	不安定な 自己の努力	自己の能力	気分 自己のスキルの変動
外的	安定的な 他者の努力	不安定な 他者の努力	他者の能力 課題の困難さ	運 他者のスキルの変動

Table 3: 望ましい自己の特性から生成された過去の事象に対する3次元分類(人数)

	統制可能		統制不可能		合計
	安定	不安定	安定	不安定	
内的	58	62	76	22	218
外的	19	14	47	22	102
合計	77	76	123	44	320

Table 4: 望ましい自己の特性から生成された未来の事象に対する3次元分類(人数)

	統制可能		統制不可能		合計
	安定	不安定	安定	不安定	
内的	93	51	100	21	265
外的	19	12	17	7	55
合計	112	63	117	28	320

Table 5: 望ましくない自己の特性から生成された過去の事象に対する3次元分類(人数)

	統制可能		統制不可能		合計
	安定	不安定	安定	不安定	
内的	72	64	66	17	219
外的	24	17	34	26	101
合計	96	81	100	43	320

Table 6: 望ましくない自己の特性から生成された未来の事象に対する3次元分類(人数)

	統制可能		統制不可能		合計
	安定	不安定	安定	不安定	
内的	110	108	57	13	288
外的	5	9	13	5	32
合計	115	117	70	18	320

まず、「いま」の自己の望ましい特性から生成された過去の事象の場合、内的帰属と外的帰属はそれぞれ218人と102人であり、これら間に有意差が見られた( $\chi^2(1)=42.05, p<.01$ )。また、安定性と不安定性についても、それぞれ200人と120人であり、両者の間に有意差が見られた( $\chi^2(1)=20.00, p<.01$ )。しかし、統制可能と不可能の場合では、それぞれ153人と167人であり、双方の間に有意差は見られなかった( $\chi^2(1)=0.61, n.s.$ )。

次に、「いま」の自己の望ましい特性から生成された未来の事象の場合、内的帰属と外的帰属

はそれぞれ265人と55人であり、これら間に有意差が見られた( $\chi^2(1)=137.82, p<.01$ )。また、安定性と不安定性についても、それぞれ229人と91人であり、両者の間に有意差が見られた( $\chi^2(1)=59.51, p<.01$ )。しかし、統制可能と不可能の場合では、それぞれ175人と145人であり、その差は有意傾向にとどまった( $\chi^2(1)=2.81, p<.10$ )。

続いて、「いま」の自己の望ましくない特性から生成された過去の事象の場合、内的帰属と外的帰属はそれぞれ219人と101人であり、これら間には有意差が見られた( $\chi^2(1)=43.51, p<.01$ )。また、安定性と不安定性についても、それぞれ196人と124人であり、両者の間に有意差が見られた( $\chi^2(1)=16.20, p<.01$ )。しかし、統制可能と不可能の場合、それぞれ177人と133人であり、その差は有意傾向にとどまった( $\chi^2(1)=3.61, p<.10$ )。

さらに、「いま」の自己の望ましくない特性から自由記述された未来の事象の場合、内的帰属と外的帰属はそれぞれ288人と32人であり、これら間に有意差が見られた( $\chi^2(1)=204.80, p<.01$ )。また、安定性と不安定性についても、それぞれ185人と135人であり、両者の間に有意差が見られた( $\chi^2(1)=7.81, p<.01$ )。さらに、統制可能と不可能の場合、232人と88人であり、両者の間に有意差が見られた( $\chi^2(1)=64.80, p<.01$ )。

これらの結果から、「いま」の自己の望ましい特性であっても、望ましくない特性であっても、自己の内的要因に帰属する人が多いことが示唆された。この結果は、人々が「いま」の自己を自らの努力や能力の結果として捉え、その延長上に未来の自己を捉えていることを示唆している。また望ましくない自己の特性から生成された未来の事象において、統制可能・統制不可能に有意差が見られたという結果は、望ましくない自己の特性を努力によって変えていき

いという現れではないかということが考えられる。

### 3. 評定値の分析

2. で述べた Weiner(1985)に基づく分類結果は、これまで明らかにされてきた帰属理論に沿ったものである。しかし冒頭で述べたように、帰属理論のような従来の科学理論と対比するよりも、自己の素朴理論そのものを検討しなければならない。そこで、本研究では、評定値の分析を、自己の素朴理論そのものの構築及び運用過程の分析と位置づけることにする。

まず、運命への原因帰属度、自己への原因帰属度、再現可能性度、自己利益度というそれぞれの次元が互いに独立しているかどうかを検討するために、相関係数を算出した。その結果、運命への帰属度と自己への帰属度との相関係数は.16、運命への帰属度と再現可能性度との相関係数は.24、運命への帰属度と自己利益度との相関係数は.14、自己への帰属度と再現可能性度との相関係数は.10、自己への帰属度と自己利益度との相関係数は-.03、再現可能性度と自己利益度との相関係数は.10だった。この結果は相関がないか、極めて弱い相関にすぎないことを示唆している。そこで、本研究では、それぞれの次元が一応互いに独立しているとみなして以下の分析を行った。

各項目の評定値(Table 7)について、2(自己の特性：望ましい・望ましくない)×2(事象：過去・未来)の2要因分散分析を行った。各要因とも被験者内要因である。

Table 7: 各次元の評定値の平均

	過 去		未 来	
	望ましい	望ましくない	望ましい	望ましくない
1. 運命への帰属度	3.29	3.10	3.43	3.19
2. 自己への帰属度	3.59	3.96	3.74	4.22
3. 再現可能性度	3.15	3.32	3.42	3.27
4. 自己利益度	3.65	2.24	3.83	1.99

運命への帰属度については、自己の特性条件の主効果( $F(1,319)=14.31, p<.01$ )、および過去・未来条件の主効果が有意であり( $F(1,319)=4.14, p<.05$ )、望ましい特性条件の評定値が望ましくない特性条件に比べて高く、未来条件の評定値が過去条件に比べて高かった。

自己への帰属度については、自己の特性条件の主効果( $F(1,319)=12.18, p<.01$ )、および過去・未来条件の主効果が有意であり( $F(1,319)=67.20, p<.01$ )、望ましくない特性条件の評定値が望ましい特性条件に比べて高く、未来条件の評定値が過去条件に比べて高かった。

再現可能性度については、過去・未来条件の主効果( $F(1,319)=5.23, p<.05$ )、および両者の要因の交互作用が有意だった( $F(1,319)=9.56, p<.01$ )。交互作用が有意だったため単純主効果の検定を行ったところ、未来条件に対する自己の特性条件の単純主効果が有意であり( $F(1,319)=4.28, p<.05$ )、望ましい特性条件の評定値が望ましくない特性条件に比べて高かった。

自己利益度については、自己の特性条件の主効果( $F(1,319)=459.60, p<.01$ )、および両者の要因の交互作用が有意だった( $F(1,319)=10.45, p<.01$ )。交互作用が有意だったため単純主効果の検定を行ったところ、自己の望ましくない特性条件に対する過去・未来条件の単純主効果が有意であり( $F(1,319)=7.94, p<.01$ )、過去条件の評定値が未来条件に比べて高かった。

これらの分析結果から、いくつかの事実が示唆された。まず第一に、運命への原因帰属度において、望ましい特性条件の評定値が望ましくない特性条件の評定値に比べて高かったという結果は、「いま」の自己の望ましい特性から析出された事象は運命に帰属されやすいことを示している。また自己への原因帰属度において、望ましくない特性条件の評定値が望ましい特性

条件に比べて高かったという結果は、「いま」の自己の望ましくない特性から析出された事象は自己に帰属されやすいことを示している。このことは、成功の原因を外的要因に帰属し、失敗の原因を内的要因に帰属しようとする自己卑下のバイアス(高田,1987)と類似する。このようなバイアスは、我が国におけるプロトタイプな帰属傾向として位置づけられていることから、「いま」の自己の特性に基づいて事象を析出するときには、社会的要因が深く関与しているのではないかと考えられる。

また、運命への原因帰属度において、未来条件の評定値が過去条件の評定値に比べて高かったという結果は、「いま」の自己の特性から未来の事象を析出する方が過去の事象を析出するときに比べて運命に帰属されやすいことを示唆している。このことは、運命への帰属を含む外的要因への帰属が少ないという Weiner(1985)の分析結果からだけでは不十分である。したがって、このような評定値に基づく分析を行うことによって、自己の素朴理論そのものに着目しなければならぬという本研究の目的が、この結果からも再認識できると考えられる。

第二に、自己への原因帰属度において、未来条件の評定値が過去条件の評定値よりも高かったという結果は、被調査者が析出した未来の事象の方が過去の事象に比べて自己の内的要因に帰属しやすいことを示唆している。これは、未来の事象が未だ起こり得ない事象であり、努力や能力によっていかようにも析出できるからであると考えられる。またこの結果は、「いま」の自己を努力や能力の結果であると捉え、その延長上に未来を捉えているという Weiner(1985)の分析と合致する。

第三に、再現可能性の場合、過去と未来で被調査者が析出した事象の再現可能性が異なっている。特に、未来条件において自己の望ましい特性の評定値が望ましくない特性の評定値に比

べて高かったという結果は、自己の望ましい特性から析出された事象は繰り返し生じると捉えていることを示唆している。一つの解釈として、自己の望ましい特性から析出された事象は自己にとって都合のよい事象であり、それが未来のある時点において生起してほしいという期待が含まれているのではないかと考えられる。

第四に、自己利益度の場合、望ましくない特性条件において過去条件の評定値が未来条件の評定値に比べて高かったという結果は、望ましくない特性から析出された過去の事象は未来の事象に比べて自己利益があったと捉えていることを示唆している。これは望ましくない特性から析出された事象が、過去の時点においては自己に不利益があったとしても、「いま」の拡がりの中では自己にとっては利益があったと解釈をすることができる。ただ、望ましくない特性から析出された事象が、過去の時点において不利益をもたらしたかどうかは、本研究の結果からは明らかでないので、今後更に検討する必要があると考えられる。

## 総合的考察

以上の結果から、自己の素朴理論の内容、構築過程及び運用過程が明らかになった。まず、自己の素朴理論の内容は、人間関係やパーソナリティが中心であることが示唆される。これは自己の素朴理論が個々人の個人的・社会的経験に基づいて構築されると考えると妥当な結果である。また「いま」の自己の特性から析出された過去・未来の事象は、Weiner(1985)の分析結果及び評定値の分析結果からも明らかのように、努力や能力が深く関与している。これは従来の帰属理論に基づく予測と自己の素朴理論が一致している可能性を示唆している。その一方で、運命への原因帰属の分析結果から、単に従来の帰属理論に依拠するだけでは不十分である

ことも示唆している。このことは、自己の素朴理論そのものに着目する必要があるという本研究の目的に合致するものであり、本研究のアプローチの有効性を示唆するものであると考えられる。

次に、本調査で採用した自己生成項目の評定に関しては、「いま」の自己との関連で生成された特性、あるいは生成された過去および未来の事象はあくまでも個々人が持つ主観的な基準に従ったものである。また、その事象に対する評定も極めて主観的なものである。いずれも客観的な基準があるわけではなく、あくまでも生成する個々人の内的な立場から捉えたものである。しかし、生成された事象は「自己にとって重要な事象」として操作的に定義されたものであり、それに対する個々人の評定という点では共通している。故に、評定されるべき事象が個々人の間で異なり、またその評定の際の基準も個々人の内的なものであるとしても、項目と評定との関係という点では、他者との比較が可能である。したがって、この方法は、調査者が前もって規定した項目を評定させる従来の方法に比べて、個々人の主観的な側面を客観的に把握できるという点で有効であると思われる。

最後に本研究で問題となるのは、この方法によって明示された自己の素朴理論の妥当性である。つまり、「いま」の自己の特性の原因と考えられる過去の事象あるいは「いま」の自己の原因として未来で生じるとされる事象との因果連関的な把握、さらにはそれに対する評定値から導き出された自己の素朴理論がどの程度自己を説明できるかということである。冒頭部で述べたように、明示化された自己の素朴理論と自己の行為を生成する理論や自己の内面に関する知識との間には深い関係があり、前者から後者を推測することができる。したがって、本研究で明らかになった自己の素朴理論から、自己理論を構築していくことは可能である。ただし、

本研究の対象が大学生に限定されていることや本研究の分析方法が自己生成項目の評定値の平均に限定され、個々のデータに関する検討が十分に行えないことなどを考慮すると、今後さらに方法論の改善が必要であると思われる。

また、このような自己の素朴理論は、最近注目されている状況的認知論とも深く関係しているように思われる。状況的認知論は表象主義を批判するが、素朴理論に関する一連の研究はその巻き返しとして位置づけることができる。状況的認知論の立場からすれば、われわれが自らの行為を開始する前に、それが遂行されるのに必要な理論が明示化される訳ではない。むしろわれわれの行為は状況に埋め込まれ、外界と交渉する中で生み出されるものである。これは、Suchman(1987)の言うプランのように、行為を説明する理論は後から行為を説明するための物語に過ぎないということになる。自己の素朴理論が行為を説明する理論として深く関わっているならば、自己の素朴理論は後から行為を説明するための理論として位置づけられる。このことは、従来の自己研究の中では論議されてこなかった点であり、今後の自己研究の発展にとって非常に重要ではないかと考えられる。

## 引用文献

- 蘭千寿・外山みどり(編) 1991 帰属過程の心理学 ナカニシヤ出版。
- 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, 40, 157-163.
- 遠藤由美 1995 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, 11, 134-144.
- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. 1984 *Social Cognition*. New York: Random House.

- ファーンハム, A. F. 1992 細江達郎 (監訳)  
 しろくと理論 - 日常性の社会心理学-  
 北大路書房.  
 (Furnham, A. F. 1988 *Lay theories: Everyday understanding of problems in the social science*. Pergamon Press.)
- James, W. 1890 *Principles of psychology*. New York; Henry Holt.
- 丸野俊一 1994 素朴理論 やまだようこ・佐々木正人・橋口英俊・湯川良三・高橋恵子・稲垣佳代子 (編) 児童心理学の進歩, Vol. 33, 金子書房 Pp. 92-116.
- 中村陽吉 (編) 1990 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会.
- 野村幸正 1995 自己についての素朴理論 - 社会・文化的状況に埋め込まれた自己 - 日本心理学会第 59 回発表論文集, S60.
- 野村幸正・西田晃一 1992 “いま”の拡がりの範囲, 方向の評価 - 双対尺度法および因子分析法 - 心理学研究, 63, 133-139.
- Ross, L. 1977 The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in the attribution process. *Advances in Experimental social Psychology*, 10, 173-220.
- Suchman, L. 1987 *Plans and situated actions: The problem of human machine interaction*. New York; Cambridge University Press.
- 高橋恵子・波多野誼余夫 1993 鍵となる情報が与えられたことによる素朴概念の変化: 銀行の場合 日本教育心理学会第35回総会発表論文集 p. 77.
- 高田利武 1987 社会的比較における自己卑下の傾向 実験社会心理学研究, 27, 27-36.
- Weiner, B. 1985 An attributional theory of achievement motivation and emotion. *Psychological Review*, 92, 548-573.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.